

令和5年度 練馬区立光が丘むらさき幼稚園 学校評価報告書

練馬区立光が丘むらさき幼稚園
園長 篠原 直子

1 自己評価結果

(1) 概要

今年度は5月に新型コロナウイルスが5類に移行し、感染拡大防止による様々な制限が緩和された。それに伴い、開園当初より本園の特色である「人とのかかわり」に重点をあてた「共に育つ・共に育む」教育活動を少しずつ再開することができた。

本園の教育活動について、保護者アンケートでは、19項目中16項目において概ね達成しているという高評価をいただいた。教育目標の達成については、「先生や友達に親しみを感じ、関わりを楽しんでいるか」について、90%の保護者がA「あてはまる」を選んでいる。また、特色ある教育について「一人一人の興味や関心に応じて、園内の環境が工夫されていたか」「自然の変化に目を向け様々なことを感じられるような園庭の環境が充実していたか」、教職員についての「教職員は笑顔で明るく接していたか」の項目においても、90%以上の保護者からA評価をいただいた。

自由記述においても、本園の教育が一人一人の幼児を温かく肯定的に受け止め、共に育ち合う関係を育んでいること、それぞれの興味関心に応じた遊びを通して、様々な学びを重ねていること、教職員と保護者が連携し、共に育む教育が行われていることを高く評価していただけた。

教職員の自己評価においては、前期は「園務分掌の遂行と業務改善」「安全点検の実施及び安全配慮に関する情報共有」の2点において、平均値3未満であった。これは、今年度新規採用教諭および年度途中での産育休代替教諭の配置により、本園での教育活動が初めての教員が半数を占めたことも大きく影響していると考えられる。後期には、全項目において平均値3以上の自己評価となった。

【成果】

- ・園内研究では「多様性を尊重しつながりを深めるための環境や援助の工夫」をテーマに、大学教授や専門機関等の講師を招聘し研究を進めた。また区立幼稚園教育会など外部研修会においても、担当教諭が研究部長や推進委員として役割を果たした。新規採用教諭の訪問指導では、学年の教諭や管理職も参加し、園全体で学びを共有することができた。これらの取組により、教職員も共に学び合う関係が構築され、資質向上につながっている。
- ・日々の記録に基づく幼児理解の深化と環境構成や援助の工夫は、それぞれの教員が自身の経験ステージに応じて取り組んだ。今年度は、4歳児が年度当初の在籍数が少なく学年で合同保育を行なったこと、5歳児も学年で取り組む機会を意図的に増やしたことにより、担任間の連携を深めることができた。
- ・園内の自然環境や栽培物を活かした様々な取組や体験について、保護者から高評価を受けた。見通しをもった環境整備や臨機応変に教育活動に組み込む柔軟な対応と教職員間の連携が功を奏したと考える。
- ・保護者への発信については、今年度より管理職を中心に「ヤァヤァグングン通信」として日々の幼児の姿や幼児が経験している学びについて、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の各項目を引用し、A3版掲示物を降園時に掲示するようにした。保護者からは概ね好評であった。
- ・地域の子育て支援に関しては、毎月2回の未就園児の会に加え、9月より未就園児親子向けに週2回保育室開放を行った。在園児の弟妹や次年度の入園希望者を中心に利用者が増えつつある。

【課題】

- ・新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことにより、保護者や会計年度任用職員より感染リスクへの対応や情報提供についての不安や要望があった。
- ・教員の自己評価においては、幼児の実態や特性が多岐に渡ることにより、個別の支援内容や環境構成の工夫に難しさを感じたり、介助員の配置数が多いため密な連携を行うことに困難を感じたりしていることが示された。
- ・施設や園庭環境の安全管理および怪我や感染状況などの情報については、引き続き園内で密に連携をとり、共有する必要がある。

- ・園務分掌の遂行および業務改善については、教員の自己評価が他項目に比べ低かった。研修の機会拡充などの資質向上への努力や行事の実施に向けての準備、個別に支援の必要な幼児に関する文書作成の増加など、業務改善については引き続き検討を要する。

【改善策】

- ・感染症情報や不審者情報については、引き続き、国及び都道府県、区で示されたガイドラインや指針に準じて適切な対応を行う。また情報の掲示や発信の方法について適時的確に行えるよう、園内でも共有していく。
- ・教職員が園の教育方針を理解し、同じ方向性を共有して各業務にあたれるように、各学期の始まりと終わりに、具体的な園の経営方針を伝える。特に介助員は、各担任と具体的な支援について話し合う時間を設けると共に、講師を招聘して特別支援研修を行い、具体的な個別支援の方策や環境の工夫などについて、共に学び合えるようにする。また、参加できなかった職員に資料等で研修内容を共有できるようにする。
- ・個別に支援の必要な幼児の在籍や転入园児が多いことなどを鑑み、文書等の作成書式や内容、分担を見直し、業務のスリム化を図る。
- ・安全面の配慮については、学期ごとに危機管理マニュアルの読み合わせやヒヤリハット事例の共有を行うなど、会計年度任用職員を含めた園全体で情報共有を図る。

(2)根拠となる資料

教育活動アンケート集計結果報告(表 1)

自己評価総括表(表 2)

光が丘むらさき幼稚園の教育活動アンケート集計結果報告 (回答数 63/在籍数 66 回答率 95.5%)

表1

A:あてはまる B:まああてはまる C:あまりあてはまらない D:あてはまらない (数字は% 小数点1桁以下四捨五入)

	質問事項	A	B	C	D
1	本園の園児は、のびのびと園生活を楽しんでいると思いますか？	89	10	—	1
2	本園の園児は、遊びや生活に主体的に取り組んでいると思いますか？	81	19	—	—
3	本園の園児は、体を動かして遊ぶことを楽しんでいますか？	85	14	1	—
4	本園の園児は、先生や友達に親しみを感じ、かかわりを楽しんでいると思いますか？	90	10	—	—
5	本園の園児は、園生活の中で必要な基本的な生活習慣が身についていると思いますか？	65	35	—	—
6	一人一人の興味や関心に応じて、園内の環境が工夫されていましたか？	90	10	—	—
7	自然の変化に目を向け、様々なことを感じられるような園庭の環境が充実していましたか？	97	3	—	—
8	様々な人とかかわり、親しみを感じる機会が充実していましたか？	87	13	—	—
9	豊かな直接体験を重ねられるような機会が工夫されていましたか？	89	11	—	—
10	園だより、ヤアヤアグングン通信などの配布物や掲示物、子育てトークや保護者会などを通じて、教育方針や教育活動・内容は、伝わりましたか？	87	13	—	—
11	保育参加・保育参観・各種行事などを通じて園生活の様子や子どもたちの成長を感じることができましたか？	84	16	—	—
12	登降園時や園庭開放、個人面談などの機会を通じて、園はお子さんについて相談できる場でしたか？	75	25	—	—
13	避難訓練や安全指導などを通して、安全に対する意識が幼児、保護者に浸透していましたか？	76	24	—	—
14	幼稚園は、施設や遊具などの安全管理に配慮し、怪我などの対応や報告は適切でしたか？	73	27	—	—
15	幼稚園は、子育ての支援に取り組んでいると思いますか？	86	14	—	—
16	幼稚園からの園だよりや掲示などでお知らせしている感染症情報や不審者情報、地域の情報などは、役に立ちましたか？	67	32	—	1
17	教職員は、笑顔で明るく接していましたか？	94	6	—	—
18	本園の教職員は、協力し合いながら、一人一人の幼児理解に努め、子どもの発達や個性を活かした指導をしていると思いますか？	89	11	—	—
19	本園の教職員は、意欲的に講師や区内幼小中学校の教員と研修に取り組み、専門性を高める努力をしていますか？	83	17	—	—

自己評価総括表

A:4点 B:3点 C:2点 D:1点 平均値(前期→後期)

表2

1. 教育活動

短期経営目標	具体的方策	評価指標目標値 【A:4点 B:3点 C:2点 D:1点】		自己評価結果 ○成果と課題 *改善策	
		取組(目標)指標	成果指標		
幼児が夢中になって遊び、豊かな学びにつながる保育の展開	個の幼児の特性や友達関係、集団の育ちなどを、肯定的かつ的確に捉える幼児理解の深化	A	個の特性、幼児同士の関係、学級の育ちなどの視点から、それぞれが経験していることを捉え、援助を振り返る(ほぼ毎日)	個と幼児同士の関係性、集団などの視点から、幼児の実態を捉え、翌日の援助や環境構成に生かしている(ほぼ毎日)	<p>○日々の振り返りの際に、幼児の姿を読み取り、次はどのような経験が必要なのか、どのような教材や環境があれば遊びが更に充実するのかを考えている。援助や教材については、個人の実態に合わせたものになるように工夫している。また、記録の際に、保護者や介助員に何を伝えどのように連携を図っていくのかも考えるようにしている。</p> <p>○特別な支援が必要な幼児に対して、介助員との対話や連携を意識しながら、関わる時間を設けていった。担任との関係が深まることで、学級の友達の輪の中で一緒に過ごす場面も増えた。</p> <p>○幼児の遊びを中心に、楽しんでいいることや経験していることを記録した。その中で個々の幼児の思いや育ちを理解できるよう意識した。幼児同士の関係性や集団としての育ちを捉えることには難しさを感じている。</p> <p>○担任同士で、その日のできごとや互いの読み取り、援助などを話し合っている。</p> <p>○幼児の特性に応じた対応が必要な場面が多く、その場で担任同士が調整することも多い。一方で、介助員との連携を密にする必要もあるが、その人数や場面が多いことで対応しきれないこともある。</p> <p>○安心感をもつまでに時間がかかる幼児もいたが、2学期後半にはほとんどの幼児が安心感を持っている。新しく入ってきた転入園児や他学年の幼児を気に掛けたり、受け入れたりする姿が多く見られた。</p> <p>*日々の記録を活かして、現在ある指導計画や行事の取り組みなどを改善していきたい。</p> <p>*幼児だけでは思いつかないような素材の使い方、描画製作技法などをもっとこまめに提示したり、全体で取り組む機会を設けたりしていく。</p> <p>*学級や学年を超えた関わりをさらに育んでいけるよう、教職員間で連携を強めていきたい。</p>
		B	個の特性、幼児同士の関係、学級の育ちなどの視点から、それぞれが経験していることを捉える(週1回)	幼児同士の関係性や集団の育ちを捉え、翌週の援助や環境構成に生かしている(ほぼ毎週)	
		C	遊びや生活の中で幼児が経験していることを意識して記録する(ほぼ毎日～週1回)	学期ごとに幼児の育ちや関係性、集団の変容を振り返り、次期の援助に生かしている(学期ごと)	
		D	日々の幼児の遊びや生活の様子を記録する(ほぼ毎日～週1回)	日々や週、期の幼児の姿、学級集団の様子を記録し、振り返って変容や経験を理解している(学期ごと)	
			3.5→3.75	3→3.25	
豊かな遊びを生み出す環境の工夫	心揺さぶられる直接体験を重ね、豊かな遊びを生み出す環境の工夫	A	年間の見通しと幼児理解を基に、日々教材や環境を工夫実践(ほぼ毎日)	約8割の幼児がその幼児なりに、主体的に環境に関わり、豊かな経験を重ねている	<p>○幼児の遊びに合わせて環境を構成できるように意識した。より本物らしくなるよう試行錯誤する姿や少し難しいことでも友達との刺激を受け、自分もやってみようとする姿が見られている。</p> <p>○自分で遊びを見つけて、遊びを進めようとする姿が多い。場づくりや、制作など適宜教材や環境の提案なども意識できた。</p> <p>○気になる幼児への援助や関わりに集中しがちで、自分たちで遊びを進めていく幼児への援助が遅れてしまうことがあった。</p> <p>○こだわりや不安の強い幼児も、教師とのやりとりの中で、部分的にでも自分なりに参加する場面が増えてきている。</p> <p>○幼稚園生活の中で、共通体験できる遊びが経験できるように一日の中で時間を作るようにしている。個々の理解や集団への参加の差が大きく、大抵の幼児が分かり喜び遊びを考え工夫するようにしている。</p> <p>*幼児同士のイメージを掴み、さらに遊びが深まるような援助を心がけていく。本物らしさ、人とのやりとりや動きが生まれるような物や環境を意識していく。</p> <p>*環境構成や教材について他の教員に尋ねたり、資料などから指導の工夫を学んだりして、保育に生かせるよう努める。</p>
		B	年間の見通しを持って適宜教材や環境の工夫を実践(週1回程度)	約半数の幼児がその幼児なりに、主体的に環境に関わり、豊かな経験を重ねている	
		C	指導や環境の見直し・改善を月1回程度行い、実践	約半数の幼児が自分なりに、主体的に環境に関わっている	
		D	これまでやった教材を生かして実践	主体的に環境に関わり、遊びを楽しんでいるのは半数未満の幼児である	
			3→3.75	3→3.5	
互いの存在を受け入れ合っていく温かな関係性の構築	幼児が自身を受け入れられている安心感を基盤に、互いの存在を受け入れ合っていく温かな関係性の構築	A	幼児同士の関係の実態把握や指導の工夫を週1回以上行い、実践に生かす	約8割の幼児が安定して園生活に取り組み、人と関わることを楽しんでいる	<p>○一人一人の幼児のありのままの姿を受け止め、個々に合わせた援助を心掛けたことで、ほとんどの幼児が安定して幼稚園生活を過ごしている。様々な幼児と触れ合う、お互いの楽しんでいること、好きなこと、良さなどに気付けるように環境構成をする、活動や援助を取り入れるなどすることで、互いを受け止め、温かな関係性を築けている。</p> <p>○幼児一人一人が安心感の中で過ごせるよう信頼関係の構築に努めており、多くの幼児が安定して園生活に取り組んでいると感じる。</p> <p>○遊びたい友達がはっきりしてきたものの、思うように関われない幼児もいるので、援助や環境の工夫を担任間で話しながら行っている。</p> <p>○学年での関わりやつながりを意識して取り組んできた結果、幼児同士の関係性が広がり、新たなつながりが見られている。その中で自己発揮し、自信をつけていく姿が見られている。</p> <p>○人前や行事が苦手だったり、相手の行動を受け入れたりすることが難しい幼児にも、その幼児なりに安心できる環境を幼児に寄り添いながら考え安心感をもって生活や遊びができるようにしている。</p> <p>*他学級、他学年の幼児の関わりをもてるきっかけを意図的にもっと作っていき、人と関わる楽しさや、嬉しさをさらに感じていってほしい。</p> <p>*さらに安心感を基盤に、色々な人と関わる楽しさを感じられるよう関わっていく。</p>
		B	幼児同士の関係の実態把握や指導の工夫を月2回程度行い、実践に生かす	約半数の幼児が安定して園生活に取り組み、人と関わることを楽しんでいる	
		C	幼児同士の関係の実態把握や指導の工夫を月1回程度行い、実践に生かす	約半数の幼児が安定して園生活に取り組んでいる	
		D	幼児同士の関係の実態把握を学期に1回程度行う	安定して園生活に取り組んでいるのは半数未満の幼児である	
			4→3.75	3.75→3.75	

2. 教員の経営参画

資質向上に向け、互いに学び合う関係の構築	自身の課題に向けて研修・研鑽を重ね、互いに共有し、共に学び合う関係の構築	A	週1回以上実施・実践	他の教員との協力のもと実施・実践し、成果を実感している	<p>○園内研や区幼教などでは、他の教員の意見を聞きながら、共に学び合う関係や意識をもっていくことができた。学んだことを日々の保育に取り入れ実践している。</p> <p>○新採研や訪問指導では、幼児理解の多様な視点や環境構成の工夫などについて学んだ。環境構成や教材研究など学んだことを生かし、保育の中で実践することが課題である。</p> <p>○学年、園全体とする研修や話し合いを通して、試行錯誤しながら実践し、成果に繋がるようにしている。</p> <p>*他園や他校種の研究発表会や研修など、保育や授業を見る機会をもっと設けていきたい。</p> <p>*園内研修等では互いに発言しやすい雰囲気や機会づくりに努める。</p>
	B	月2回程度実施・実践	計画の8割程度が実践でき、成果も概ね実感している		
C	月1回程度実施・実践	計画の6割くらいを実践した			
D	学期に1回程度実施・実践	計画の半分以下を実践した			
3.5→3.25		3.25→3.5			
安全・安心な幼稚園づくり	園務分掌の責任ある遂行と業務改善に向けた積極的な提案及び実施の工夫	A	自身の分掌を遂行し、積極的に業務改善に向けた提案と実施を適宜行う	自身の分掌だけでなく園全体の経営に参画しつつ、業務改善に向けて力を発揮した	<p>○自分の園務分掌だけでなく、担当外のものでもできるだけ意識し、進捗状況を確認したり、助言や協力したりしてきた。</p> <p>○自分自身見通しをもって、行事や日々の保育の取り組む意識をもつことができた。しかし、その中で提出書類や、準備物に漏れがあったこともあった。</p> <p>○園務分掌の内容や行事の運営方法などを知り、取り組んだ。不安な点は他の教員に尋ね、サポートを受けながら遂行している。</p> <p>○学年会、職員会議などの場で、実施計画を提案し、案を作成しながら資質向上するようにしている。その中で業務改善を考え工夫するようにしている。</p> <p>*次年度に向けて活動内容を精査したり、準備等の負担も減らせるように方法を探ったりしていきたい。</p> <p>*一人では漏れがあるため、複数人で確認したり、声を掛け合ったりしていくことが必要。</p> <p>*分担できるところなどを見つけ、役割を割り振る意識をつけていく。</p>
		B	これまでの反省や課題を、分掌の遂行に活かし、新たな提案を学年会・職員会議等で行う	自身の分掌を、責任を持って遂行し、反省・課題を踏まえて提案を行なった	
		C	自身の分掌を理解した上で、課題解決に向けて職員会議等で提案を行う	自身の分掌について、管理職や他教員に相談しながら、遂行した	
		D	自身の分掌の内容を理解し、遂行する	自身の分掌を管理職や他教員のサポートを受けて遂行した	
		3→3		2.5→3.25	
安全・安心な幼稚園づくり	定期的な安全点検と、日々の教育活動における安全面の配慮及び情報共有	A	危機管理マニュアルなどにおける役割を自覚しながら、定期的な安全点検を実施するとともに、日々安全配慮を行い、情報を共有する(毎日・適宜)	定期的な安全点検と共に、日々の保育場面において、安全配慮を行い、園全体で情報を共有できるよう積極的に発信した(ほぼ毎日)	<p>○定期的に安全点検を行い、改善点があればすぐに改善することを意識し取り組んできた。また、日々の保育でも安全面の配慮を意識し、気になることがあれば共有はしてきたが、全体ではなく、学級や学年にだけになっていることがある。</p> <p>○教職員同士、ここが危なかった、今幼児がこのようにして遊んでいて少し危険がある、などの情報共有ができた。</p> <p>○月一回の安全点検を実施し、環境の見直しを行った。注意すべき点などを他の教員から学び、安全面の配慮事項を学んでいる。定期的な点検だけでなく、日々の保育場面の中でも幼児の様子に合わせて環境の見直しや配慮を行っていくことが課題であると感じる。</p> <p>○学年で定期的に交代しながら、保育場を仮定して安全点検を心がけている。また、日々の遊びの場面でも、幼児に安全であるかを常に気を付け配慮を忘れず、教員間でも連絡し合うようにしている。</p> <p>*教育活動における安全面の配慮及び情報共有については園全体で共有できるようにする。学期初めに機会を設ける。</p> <p>*日々の保育の中でも危険な箇所がないか意識して過ごし、その都度改善できるよう努める。</p> <p>*安全点検の結果、気を付けたところ、直したところや、保育の中で危険を伴った場面などを園全体で共有できると良い。特に、介助員も含め、巧技台やマルチパネ、積み木の組み方など、危険に関する予測を共有していきたい。</p>
		B	定期的な安全点検を実施するとともに、日々の安全配慮を行い、情報を報告する(週1回)	定期的な安全点検及び日々の保育場面において必要な安全配慮を行った(週1回)	
		C	定期的な安全点検を実施し、情報を活かして安全面の配慮を行う(月2回)	定期的な安全点検及び他教諭との情報共有を基に、自身も安全面の配慮を行なった(月2回)	
		D	定期的な安全点検を実施する(月1回)	他教員の情報を聞き、自身の安全面の配慮に活かした(月1回)	
		3→3.5		2.5→3	

3. 子育て支援体制

保護者・地域との連携協力体制の醸成	本園の教育内容や幼児の育ちについての具体的な発信	A	幼児の成長の過程や遊びや生活の中での学びについて、具体的に適宜、発信する(降園時全体と個別に、学級通信月1回程度など)	約8割の保護者に、園での幼児の成長や経験、学びについて発信・伝達することができた	<p>○降園時や園庭開放を利用し、積極的に発信することができた。課題面に関しては、個別に保護者と丁寧やりとりし実態や援助、変容なども伝えることができ、保護者にも理解していただくことができた。</p> <p>○運動会やこども会などの行事では、当日の姿が全てではなく、それまでの家庭を大切にしていることを積極的に発信し、一人一人の取り組む様子や変容などを具体的に共有することで理解や温かいまなざし、見守りにつながった。</p> <p>○学級通信、学年通信など、月に1回発信が目標だが、難しい月もあり、特に2学期などは行事等で忙しくなると、発信が遅れがちになってしまった。</p> <p>○降園時に全体へ遊びや生活の様子を伝え、個別にも幼児の姿を伝えた。外国籍の家庭など、情報発信や伝達が難しい家庭もあるので配慮したい。</p> <p>○学級学年では毎日、その日のできごとや幼児の姿を降園時に保護者に伝えている。また予定や連絡事項は、ホワイトボードで伝えるようにしている。定期的な保護者会や面談では、さらに互いの思いが理解できるようにし、連携を深めてきた。</p> <p>*学級通信、学年通信においては、見通しをもち、発行日をあらかじめ決めるなどし、その中で分担しながら行っていくようにする。</p> <p>*保護者と話す時間に偏りがあったと思うので、保護者との関わりの時間をなるべく平等になるように意識していく。</p> <p>*外国籍の保護者について、個別の説明やフォローが足りない部分があり、さらに意識をしていく必要がある。</p>
		B	遊びや生活の中で経験していることや変容・成長が見られたことを発信する(降園時全体に、学級通信月1回程度)	約6割の保護者に、園での幼児の成長や経験、学びについて、発信・伝達することができた	
		C	遊びや生活の中でのできごとや様子を伝える(降園時全体に、学級通信学期1回など)	約半数の保護者に、園での幼児の様子について、発信・伝達することができた	
		D	伝達事項など必要なことを伝える	園での幼児の様子や経験について、発信・伝達できたのは半数以下である	
		3.25→3.5	3.5→3.5		

2 学校関係者評価

(1) 総括

保護者アンケートの評価結果が非常に高い。その内容から、保護者とのコミュニケーションが取れており、保護者が安心して我が子を預けていることがうかがえる。また、園児が幼稚園を楽しみにして登園していること、園での生活や遊びが充実していることも、保護者のアンケート結果や意見から読み取れる。幼児が「やりたいことができる」「自分ではできる」と思えることが自信につながり、相手への思いやりにつながっているのだろう。

【成果】

- ・教員が研修等で、しっかりとスキルを上げている。特別な支援が必要な幼児への対応や樹木など園庭環境整備といったこと全てが、子どもたちの豊かな園生活につながっている。
- ・教職員が一人一人の幼児を細やかに見守り、柔軟で丁寧な対応がなされている。これは開園当初から脈々と引き継がれているものである。教師が異動等で変わっても、その信念が守られており、園の特色となっている。
- ・保護者にとって安心できる場、周りの幼児にとっても多様な人との関わりが学びになり、育ち合っている。

【課題】

- ・少子化や保護者の就労などにより、園児数が減少している。2年保育で、長期休業中の預かり保育がないなど、時代のニーズに応じられていない面がある。
- ・子育ての不安や心配を相談しきれていない家庭もいると思われる。さらに丁寧に保護者が話せる機会を拡充する必要があるのではないかな。
- ・様々な家庭や保護者の状況、幼児の実態などに対応し、さらに多様性を尊重すること、それぞれが歩み寄ることが必要である。
- ・安全面については、家庭によって考えがあり、その違いが難しさになることもあるが、危険を予測し察知するためには、様々な直接体験による経験も必要である。

【改善策】

- ・地域の未就園児へのアプローチは大切である。空き保育室の開放など、まず園に来る機会や在園児の姿を見る機会を設けることが重要である。
- ・保護者もサークル活動などで力を発揮しており、未就園児の会では、本園の温かさやよさを感じてくださっている方が多い。公立幼稚園説明会や子育てイベントでポスターを掲示するなど、地道なアピールが必要。修了児や在園児の保護者の声を伝える機会をつくとさらによいのではないかな。
- ・多様性を受け入れ、共に育ち合うためには、それぞれが相手の立場に思いをめぐらせ、歩み寄る必要がある。園では引き続き様々な人と出会う機会をつくるのが大切である。
- ・災害に対する意識や日頃の準備は個人差もあり、各家庭の状況が異なると思われるが、発災時のシュミレーションは役に立つので、親子で防災学習センターの体験学習など、保護者と一緒に体験することで、各家庭の防災への意識向

上に効果があると思われる。

- ・幼児教育センターの設置など、全国的に行政が幼児教育の充実や質の向上に様々な役割を果たしている例もある。さらに行政にアピールし、しっかりと連携をとる必要がある。

3 評価結果の公表等

- ・ 3月保護者会で資料を配付し、園長より説明する。
- ・ 3月中にホームページでの公表を行う。(概要)

4 次年度の学校改善へ向けた園長の見解

(1) 中期経営目標の実現に向けて

令和3年度～令和5年度の評価より、次年度以降の中期経営目標を以下のとおりとする。

令和8年度までの中期経営目標

- ① 豊かな直接体験を通し、生きる力の基礎を育む
- ② 互いに尊重し協力し合う組織づくりと意欲的に学ぶ教員の育成
- ③ 家庭・地域と共に育む園の運営と子育て支援の充実
- ④ 安全・安心で、居心地のよい幼稚園づくりの推進

- ① 「豊かな直接体験を通し、生きる力の基礎を育む」については、幼児が心を動かし夢中になって取り組めるような環境を工夫し、その中でそれぞれの幼児が経験している内容を丁寧に読み取る。また、多様な人と関わり、共に育ち合うために、2年間の幼児の育ちや集団の変容を捉え、意図的・計画的に見通しをもった教育活動を推進する。特に、本区の重点課題の一つである、特別な配慮を要する幼児への支援の充実と、共生社会の実現に向けた多様性を尊重し共に育ち合うインクルーシブな教育の実現に向けて、個々の発達の特性に応じた個別の支援の充実と、幼児同士が互いにかかわり合い、認め合って共に育つ園生活となるよう、教育課程および長期の指導計画の編成について、工夫していく。
- ② 「互いに尊重し協力し合う組織作りと意欲的に学ぶ教員の育成」については、これまでも園内研究および特別支援教育研修会などを通して、各教員が幼児の姿や実践の場面をもとに意欲的に協議し、理解を深めている。共に学び合い、高め合う教員間の関係を引き続き培っていく。会計年度任用職員が多く配置されているため、園の教育方針の共通理解については、具体的な実践場面でさらに対話を重ねる必要がある。一人一人の教職員が、自身の役割を認識し、互いを尊重し協力し合う連携体制と組織をつくっていく。
- ③ 「家庭・地域と共に育む園の運営と子育て支援の充実」については、感染症拡大防止の取組が緩和され、少しずつこれまでの教育活動が再開されている。本園の特色である「人とのかかわり」を重視した教育活動については、今後家庭や地域と連携をとり、その教育力を日々の教育活動に活かしていきたい。また少子化、保護者の就労状況の変化に伴い、在園児数が減少している現状がある。地域の子育て支援のセンター的役割を果たすべく、未就園児親子への子育て支援の取組を充実していく。その中で、幼児期に必要な経験や質の高い幼児教育の内容についての発信を工夫する。
- ④ 「安全・安心で居心地のよい幼稚園づくりの推進」については、危機管理に対する全教職員の意識を高め、園全体で連携をとって対応できるように、日々の点検や定期的な訓練を実施する。安心して安全に教育活動を展開できるように、また居心地のよい温かい園の雰囲気醸成するために、環境を整備し、自然にあふれる園庭環境や清潔な園舎の保全に努める。